

横井也有と知多俳壇の交流 — 東海市白羽家資料の紹介(二) —

寺 島 徹

俳文『鶉衣』の名著で知られる尾張俳人、横井也有(一七〇二—一七八三)は、宝暦四年(一七五四)の隠居後、俳諧活動に深く心を砕いた。とくに、尾張周辺地域の地場宗匠の歳旦には、也有交遊圏とおぼしき、交流のあとが色濃くみられ、也有の半掃庵は、まさに、当時の尾張を中心とした俳人たちを結ぶ拠点の役割を果たしていたといえる。

近日、東海市横須賀の白羽家に、也有関係の一枚刷が残っていることを「尾張横須賀における楓京と知柱亭・暁台・也有の交流について——白羽家所蔵資料を紹介して——」(東海近世27号、令和元年12月)において紹介した。紙幅の関係で全容を紹介できなかったため、本稿では、也有の関係資料を全文翻刻し、また、関連資料を合わせみながら、当時の也有と尾張俳壇の関係について、いくらか知見を加えてみたい。

一 白羽家所蔵の也有関係資料について

本稿で取り上げる白羽家は、現当主の白羽泰氏のご教示によれば、中世の頃、京から尾張横須賀へ来た山伏の家系である。大教院の一枚刷によれば、白羽監物が足利將軍家に仕え、津の国四天王寺を経て横須賀に来た家柄であることを伝える。横須賀にきた監物が大教院(現・東海市横須賀町)を設け、その後、白羽家は、江戸時代を通じ、

代々、修験道における山伏として活動するのである。

明治の廃仏毀釈によって、白羽家が代々院主をつとめてきた大教院は完全に荒廃してしまっただが、甚目寺の一解院日廣上人の布教活動により、あらたに明治二十一年に日蓮宗の寺として再興され、とくに戦前の復興を経て現在に至っている。

大教院には、関係の深かった楓京の句碑が残され、現在に伝えられている。それとともに、江戸中期に、楓京の手元で集められた俳諧資料の一部が、大教院におさめられ、江戸末期までの院主であった白羽家に伝えられたということである。江戸期の資料としては、俳書、俳諧一枚刷、一枚物の俳諧資料と和歌資料等の文芸資料、御用書留、証文などの古文書類からなる。

前出の「尾張横須賀における楓京と知柱亭・暁台・也有の交流について」では、白羽家の俳諧関係資料をリスト化し、(一) 知柱亭と楓京の交流、(二) 楓京にもたらされた俳諧資料、の二つに分けて検討し、所蔵資料の概要を紹介した。白羽家資料の中で、本稿でとくに取り上げるのは、後者の中の、「尾城南大野歳旦(安永三年)一枚刷」(前稿リスト17番)、「蓬南大野歳旦(明和九年)一枚もの」(同16番)、「明和九年不老井歳旦」(同15番)の三点である。

ここで、也有と楓京、巨扇の交流について、野田千平氏「也有年譜」(『横井也有全集』)を参照しながら、掲げておく。

明和二年（一七六五）、知多大野の杉山巨扇『歳旦』に也有は、歳旦三つ物の発句入集。明和四年閏九月十八日、楓京は、半掃庵を訪問、「方間舎記」を贈られる（『藻塩草』十一）。翌、明和五年秋、京都の二月房杉三法師が諸国勸進俳吟短冊五六〇枚を持って横須賀の楓京を訪問、楓京は、その中から尾張関係六枚を写す。その筆頭に也有の句がある（『藻塩草十二』）。明和六年正月、巨扇願主で大野内宮奉納額四季吟筆頭に也有の句を掲げる（『藻塩草十三』）。同二月初旬、知多桜木の観音開扉に際し、十年余以前の開扉に奉納し秘されていた也有・桃野法印玄二堂による三つ物を継いで奉納句勸進が興行される（『藻塩草十三』）。安永元年（一七七二）十月八日、横須賀連中が願主で磨三染筆になる、横須賀東光庵薬師堂奉納の歌仙首尾に発句を贈る（『藻塩草十七』）。安永二年五月十六日、楓京、半掃庵を訪ねる（『城下遊二』）。

このように、明和期から安永二年にかけて、也有と楓京、巨扇は、しばしば交流をもった。その翌年にあたるのが、今回、紹介、翻刻する尾城南大野歳旦一枚刷（二色刷）である。楓京も参加している。

二 也有と知多大野俳壇について

それでは、「尾城南大野歳旦（安永三年）一枚刷」（縦36・4 糎、横48・8 糎）について紹介する。二色刷の俳諧一枚刷としては、早い部類のものと思われる。全文を翻刻する。

安永三 午の歳旦 尾城南大野

松竹の正直にハ
月雪の和光あり

まぢわらぬ心の塵や三ツの朝

年暮

年波や人並に世を渡りたし

春興

遠山の笑ひに海は黙りけり

梅さくや小路に時行貸し木履

ちりぬるの一間は破れて梅の花

あいさつもまた物がたし梅のはな

若草やまだ馬牛の齒にたらず

棒よりも藪から白しむめの花

、

枝ずれの疵和らぐや初がすみ

梅咲や風のもて来る鼻ぐすり

その松の朧そだつや志賀の梅

梅の春松にも松のながめあれど

白いとて寒いでもなし梅の花

古井戸に垣あたらしくむめの花

拍掌の間にく梅のかほりかな

、

火を入れぬ火燵もありて春の雨

ちり初る梅や真昼の日のとろみ

馬を牛にかえる春野、人こゝろ

菜の花や宿からば此二三軒

むめの咲比やめでたき物もらひ

被着の顔ゆかしけれおぼろ月

治聲酒の巧はさびしく春の雨

淡雪や桶茶のすゝむ朝ぼらけ

菊蘭舎巨扇

全

万愚

東呉

麦馬

かの

橘左

巨扇

寺本

野乙

其由

楓京

磨三

蝶羅

里朴

雲志

名古屋

東甫

春幸

白阿

文樵

樞甫

乙五

里宙

東湖

蠶より手廻しはやく柳かな
日の影の山にとまる桜かな

涼吾
木風
「(天)

草人東湖(花押)
(画)

六句表

なくとも水さへありて柳かな
巳の日祓に塗笠の連
立煙山をやくかとおもはれて
独丁稚の返事する間も
組板の入地に騒ぐ朝の月
蒔ほど芥子の種のこるなり

半掃庵
也有子
巨扇
万愚
東呉
麦馬
かの

京橋治板「(地)

以上が本文になる。主宰者である知多大野の巨扇が巻頭であり、つぎに、知多、鳴海俳壇、そして、名古屋俳壇の次に配置される。巻軸は、也有を立句にした大野俳人による表六句が据えられる。この構成は、也有を取り巻く、宝暦、明和、安永期の尾張の地場宗匠(巴雀、木兎、白尼、理然、八亀、鷗沙)らの歳旦のあり方に通底する形式である。

大野連中は、尾張を中心とした俳壇規模の大きい地場宗匠たちのように、俳書形式の大きな歳旦を出すことはなかったが、一枚刷のような歳旦は、継続的に出していた様子がうかがえる。よく知られるところでは、同時期の鳴海俳壇(千代倉)の歳旦に形式が似ている。把握できるものだけでも、巨扇には、次の歳旦一枚刷がある。

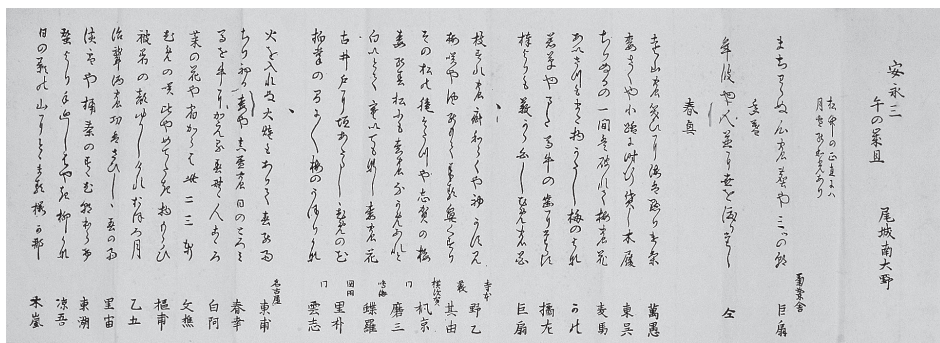


図1 尾城南大野歳旦(安永三年)一枚刷 天 白羽泰氏所蔵

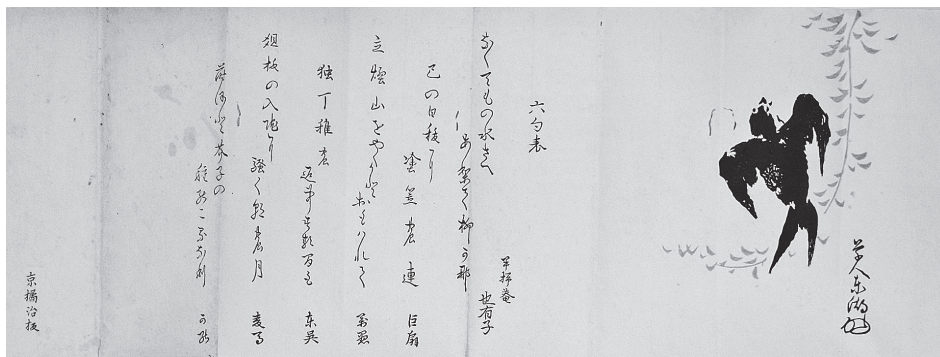


図2 同 地 白羽泰氏所蔵

- ①宝暦九年（一七五九）己卯尾州知多郡大野歳旦（藤園堂蔵）
- ②明和二年（一七六二）大野歳旦（『横井也有全集』による・未見）
- ③天明七年（一七八七）末年尾城南大野歳旦（名古屋博物館蔵）
- ④寛政二（一七九〇）庚戌年尾城南大野歳旦（藤園堂蔵）

①の歳旦は、巨扇にとつて初期のものである。ごく簡素な作りであり、尾張の宗匠である時節庵八亀、巨扇、南空の三つ物を据える。③は、麦雨、蕉雨、かの、もとの春興、名古屋の文樵、涼吾、鴻巣の柳凡らの文通発句を載せる。④は巨扇最晩年の歳旦となる。あとで引用する追善集『夢の秋』の俳人たちと、ほぼ重なっている。蘭岡、野乙、東呉、麦馬ら大野連中に加え、文音として、文樵、里宙、涼吾らを載せる。

こうして、残存する巨扇の歳旦一枚を概観するとき、本稿で紹介する一枚刷は、②と③の間に位置するもので、也有が安永期においても、特別な存在として、知多俳壇から遇せられていたことを示すものである。

それでは、一枚刷にみえる巨扇、万愚、東甫など、楓京以外の主立つた入集者たちを順にとりあげてみたい。

巨扇は、杉山氏。寛政三年（一七九一）九月十五日没。享年七十八歳（『夢の秋』序）。『中京俳人考説』によれば、通称、利兵衛、墓地は、常滑市大野町斎年寺にあるとのことである。大野の呉服商、大黒屋の三代目。鳴海の下里家との関係の深さでもしられる。延享三年（一七四六）の如是庵歳旦がはやい。巴雀没後は、白尼、八亀の歳旦および鳴海歳旦に多くみえる。春興四句目を出す「かの」は、巨扇の娘であり、一時千代倉に嫁いだという。¹⁾ 巨扇追善『夢の秋』（寛政四年二月、東呉序）をものしている。

『夢の秋』²⁾をもとに、巨扇の行実について辿ってみよう。寛政四年二月既望に書かれた観涛亭東呉の序には、「…風流に遊び句を覓てはたがひに推敲を問ふ事、こゝに四十余とせなんなりぬ。かつて四時五節に逢毎に、その詠藻を西京東都たがひ遠近の俳友に贈酬して名声四方に聞ゆ。」と、東呉と昵懇であつた様子を交えながら、文音を中心とした巨扇の交遊の広さを伝える。また、病については、

…近ごろ老病を抱て枕に伏し給ふに、したしき友どち病床を訪ふ。

（中略）かくて日／＼に不起に赴れければ、叟いへらく、命なりと。はからずも寛政三かへりの秋長月中の五日齡七十有八にして浮世の秋の夢さめて終焉の一句を遺して、ついに泉下に帰し給ひぬ。聞く人知るとしらざると哀惜のあまり輓詞を贈て、や、机上に満てり。孝子かの女その生前の善を追ふて、是を桜木に鏤て、小冊子につらね、号て夢の秋といふ。はた是に序せよと乞ふ。

と終焉の様子と、追善集の事情について述べる。序につづいて巨扇の辞世句を掲げる。

夢さめて浮世の秋を眠りけり

ついで、「生前に碑を立て犀用巨扇居士と法証し」として、

夢覚て見ればうき世の傀儡師しやらも仏もつたふこゝろも

と辞世の歌を詠み記したということがわかる。

次に、「菊蘭舎四季発句并俳詩」として、

蘭のはなや青みきつたる麦の中

以下、四季順に発句八句を掲げ、俳詩を掲げる。このあたりは、関係の深い、白尼の影響もあろうか。

つづいて、巨扇の子息として、一枚刷でも、春興五句目に載る、橘左の、

寛政三年亥の秋菊月中の五日身まかれし
家大人生前の恩の厚きをも報しがたくて

今や没後の悔とはなりぬ

八重菊や厚き恩知る手向ぐさ

の追善句を載せる。一周忌のかのの句は、

何問ふも甲斐なき秋と成にけり

である。以下、妻、娘、孫の係累の句がつづく。

菊酒の別れとなりし泪かな

手向とは思はざりしに残る菊

翁艸残りし杖に露なみだ

これに、歳旦を通してかわりの深かった鳴海の伝芳、和菊、蝶冶らがつづくのが目につく。

以下、「各詞書略ス」として、一枚刷にも見える、「当所」(大野の

こと)の野乙、東呉、麦馬らの句を掲げる。

月とともに弘誓の船や浪しづか

麦馬(岡氏)は、哀悼の俳詩も寄せている。

この他、常滑の巴文、横須賀の大阜、名古屋の蝸角、里宙、黙我の

句をよせる。「巨扇子をいたむ詞」として、

猶哀れ物うき耳へ鹿の声

と、旧知の白尼の句を載せる。巻軸を占めるのは、津嶋俳壇を率い

有、白尼らと親交の深かった堀田木吾である。

西へ行月に連だつ旅出かな

その前書には、「巨扇子生涯心を俳諧にゆだねながら、世路いとまな

き身の上也ければ、行脚遠遊の思ひはたちて唯国く名ある俳士にせ

うそこし、句を乞ひ句を贈て居ながら風雅を楽しめりしに(下略)」と

ある。呉服商であった遊俳、巨扇の俳諧のあり方が、業俳にみられる

行脚中心のものでなく、文音中心のものであったことを伝えている。

なお、巨扇の諸所の俳人と交流が深かったことを示す資料として、

辻村逸漁のもとに残る短歌行の評点資料がある(天理図書館綿屋文庫

蔵・わ九九四―五〇―三九)。

短歌行

初雁や枕加減の肌寒ミ

片帆に受る船の月代

山壺ツ松と紅葉に染分けて

点印から、蓮阿坊白尼の評点と思われるが、巨扇の連句の付け方を示

すものと言えるだろう。

『夢の秋』に、白尼、木吾、千代倉との交流という巨扇の俳壇交流

の傾向が如実に示されていたわけだが、次席の位置を占める万愚和尚

の姿が見えない。既に物故していたためか。白羽家資料には、万愚の

一枚物も所蔵されるので、それを引用しておこう。「蓬南大野歳旦(明

和九年)一枚もの」(縦36・4糎、横48・8糎)。以下に翻刻してみ

よう。

(関防印)

壬辰の歳旦

蓬南大野

常に一言も慮ること

なし。いはんや三箴の

全きことあらん也

若水やふくんで居れぬ口の中

夢哉庵
万愚

年尾

花どもに笑はれても

来るとしハ豊ならんと

言へる野人の鉄砲を

余所にきくも耳より

なり

何事も身をおもふての岡見かな

巨扇

春興

華鳥や居ハる心をすハラせず

（万愚）（印）

以上が本文となる。今回紹介した一枚刷より年代が少し早い、このような各俳人の自筆の一枚物をもとに、歳旦一枚刷が出来上がるとみてよいだろう。

さて、一枚刷には、知多連中、横須賀連中につづき、鳴海連中がみられる。巨扇と鳴海の関係について触れておこう。

藤園堂に所蔵される鳴海歳旦一枚刷には、巨扇が毎年のように、入集している。それは、継続的に千代倉の成果を発表されている森川昭氏「千代倉家日記抄」（雑誌『夷参』参照）からも、裏づけられる。

たとえば、今回の一枚刷より、時代は少し下るが、『鳴海歳旦』詳細（中）（『夷参』7号）の、安永六年（一七七七）一月五日の条に、

「大野大こくや武兵衛、

利兵衛、巨扇丈より、例年之通、歳旦摺物来」、一月二十一日の条に「大の九八郎殿今日御帰り。巨扇子へ歳旦詠遣」と巨扇の記事がみえる。また、安永八年の一月八日の条に、「大野大こくや九八殿、為年始被参、る印（井岡家）御泊り。年玉半切紙反百持参。巨扇老、万愚老より、年頭一枚刷来。此方よりも歳旦帳差遣。」と巨扇、万愚の記述がみえる。千代倉と大野連中で、お互いの歳旦のやりとりを慣習としていたことが確認できる。

最後に、名古屋連中につれておこう。東甫は、狩野派の絵師として著名な内藤東甫である。東甫は也有ととりわけ関係が深い、次節で、未紹介の書簡資料を紹介しながら、その関係を素描する。

春幸は、旧派系の俳人と思われるが、安永初期には、暁台の暮雨巷にも参加していたことが白羽家資料からわかる。文樵は、石原氏。也有と他俳人の取り次ぎの位置を占め、也有俳諧活動において無くてはならぬ存在であった。樞甫は、也有像を描いたことで知られる。東甫の門人でもあったようだ。

東湖は、尾張の絵師。東甫の弟子とされるが、長らく、実態が不明であった。岸野俊彦編『尾張藩社会の総合研究』（平成13年）において、風折有文（一七九七年没）と同一人物であることが指摘される⁴。東湖は、也有との交流も深い。『鶉衣』には、東甫・東湖の師弟合作に、也有が賛をしたこと（東甫・東湖両筆の万歳の画賛）が知られる。つぎのようなものである⁵。

師の画けるを発句として、弟子のこれに書添へたるは、則ち脇の趣あり。我も又其鼓にはやされて、かたはらに筆をとる。是や此第賛也といはゞいふべし。

節季候につもりし雪を万歳の

けさとくわかの春は来にけり

東湖は、也有が後ろ盾となった暮雨巷の加藤暁台とも交流があった。

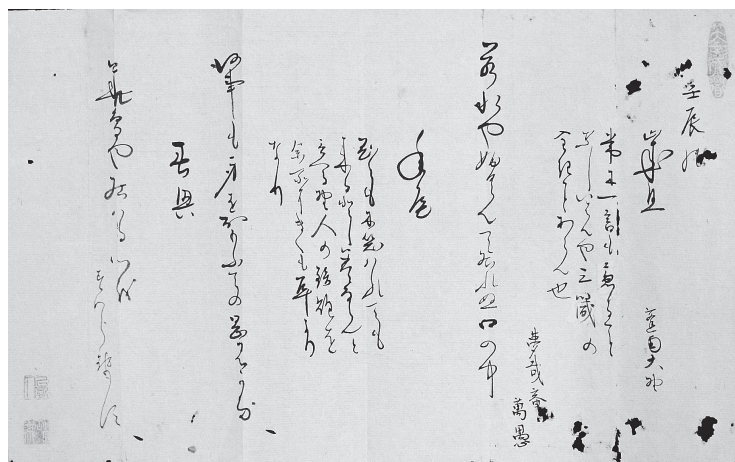


図3 蓬南大野歳旦（明和九年）一枚もの 白羽泰氏所蔵

架蔵の暁台・風折有丈画賛（縦97糎、横26・3糎）を掲げておこう。⁽⁶⁾
あすありと思ふハ春のこゝろ哉 暁台
狩野派絵師の東湖の瀟洒な画風がうかがえる〔図4参照〕。

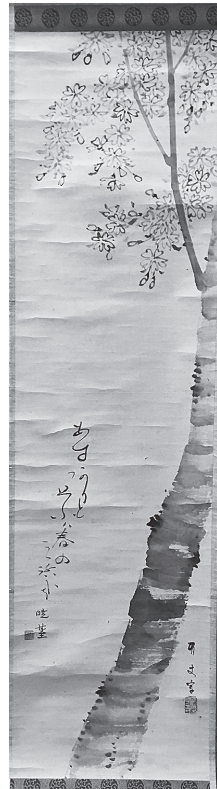


図4 暁台・有丈画賛 架蔵

巻軸の也有の句について確認しておこう。也有の句集、句稿類にはみえず、楓京の『藻塩草十八』に、「なくても水さへありて柳かな」という字足らずの形で記録される。その部分を掲げてみよう。

安永二如月上旬正月下旬城下出回吟歌僊
なくとも水さへありて柳かな 也有公
霞に残る月の名所 八亀
うどの香に行脚の杖を留られて 楓京
又書ふかと硯引よせ 其由（下略）

このように前年には、名古屋の宗匠八亀、横須賀の楓京が第三、知多萩の其由が四句目を詠み、四吟歌仙が巻かれている。この句が歳旦、春興用の句として、也有から地場の宗匠たちへ用意されていた様子もうかがえる。貴顕である也有を輪の中心に据える也有交遊圏ともいべき裾野が、こうした一枚刷資料からも確認できるのであろう。

三 也有と東甫——東甫宛書簡を紹介して

東甫（一七二八—一七八八）は、尾張藩士で狩野派の画家であった。俳諧は木屑門で、也有とは画賛を多くものしている。暁台の『姑射文庫』（明和五年）の挿絵でも知られる。也有と東甫の関係は、これまで、多くの論考があるが、ここでは、東甫宛の未紹介の也有書簡（架蔵）を紹介することで、東甫と也有の交流について若干補強してみたい。

○九月八日付東甫宛也有書簡
軸装一幅（縦15・3糎×横53・5糎）。架蔵。

如仰其後者御物遠奉存候。
今日布六も参候御噂
申候。秋冷二相成候。御安全
珍重事二奉存候。野拙も
無事参候。頃日はめづらしく
近所など出あるき申候。
御安意可被下候。屏風
御直候事少もいそぎ
申候事には無御座候。御慰と
相成候節、御染御筆可
被下候。名月之愚句御辱く
入候よし今年ハ別而あしく
候にもどつ共不仕候。
名月や星の古跡の天の河
とも申候へ共自分にも
しかと済ぬやうにてとりをき

申候。御句を御聞せ不被成、
遺憾ニ奉存候。明日之句ハ
名月ハまた荅也けふの菊
と覚悟いたし申候。明日迄
御預ケ申候。明之坊も昨日
参候よし、近所へ罷出
逢不申候。被懸御心御便
忝奉存候。其内期面拝
可申御承候。以上。

節前一日

（端書）東甫公

也有

本文は以上である。入集句と年代について、みていこう。「名月は」句は、『ありづか』に、「名月はまだ荅なりけふの菊」（全集番号一九六五）の表記で載る。「名月や」句は、『横井也有全集』に見あたらない。『ありづか』からは年代が特定できないが、明之坊の話題があることから、明之坊編『まきとおし』（宝暦八（一七五八）十一月上旬也有序）あたりが一つの目安となろう。また、かつて、一連の桐羽宛書簡を紹介した。⁸⁾宝暦六年（一七五六）から十三年（一七六三）頃の書簡であった。それらの書簡と、本書簡は、色変わりの特徴ある紙が用いられていることが共通しており、時代の近さを思わせる「図6参照」。也有年譜からも特定はできないものの、布六、明之坊と也有の交流時期からみて、この書簡は、宝暦中期から後期のものとみてよいだろう。

書簡の内容は、俳人、布六が来て東甫の話をしていたこと、也有もこの頃は、珍しく近所を出歩くことがあることを伝える。屏風の直しを東甫に依頼しているが、急ぐ必要がないこと、東甫の絵に、名月の

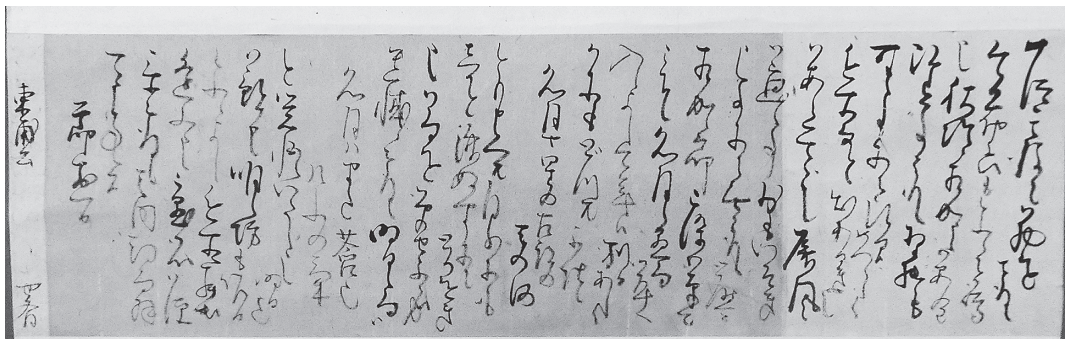


図5 東甫宛也有書簡 九月八日付 架蔵

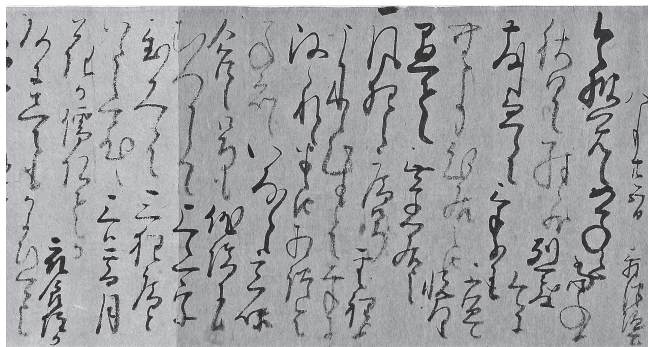


図6 桐羽宛也有書簡 八月二十五日付 架蔵

句を入れようとしているが、なかなか上手くできないことを伝える。明日が重陽なので、明日の句として、重陽の句を詠み、これと決めた。明日までこの句を預けたい。昨日、明之坊も半掃庵にやつてきたが、近所に出ていたので会えなかった、というものである。

布六は、『中京俳人考説』の「追加」によれば、『美濃派』の項目にあり、木兎・白尼門とされる。『枕百韻』（宝暦七年序）を編むことでしられる。明之坊は、宝永元年（一七〇四）生れで尾張藩士であったが、五十四歳の頃致仕している。也有と昵懇であった。

也有は数多の画賛を残したことで知られるが、そうした自筆資料に対して書簡の残存数は非常に少ない⁹。そのような中で、東甫宛書簡は、これまで、宝暦・明和期とおぼしき二通がしられていた¹⁰。

とくに、十月十九日付の東甫宛書簡は、画賛のことが詳しく述べられ、本書簡とも相通う内容である。一部引用してみよう。

…且、御画共被下、拙賛の事奉得其意候。弥以御筆は御上達そふにて、見事成事共詠入申候。尤御好の内若鮎の句、是はもやう違申候。全体水中の鮎にては無御座、ゑらをつなぎ笹葉うちかけたる鮎にいたし候賛にて御座候。水の内の鮎に笹葉は此句にて面白き所も無御座候。いつぞやも木兎此図を持参り、其賛を乞申候故、夫も断申遣候。依之先へ返と仕候。別に若鮎の句無御座候。

画賛の画について、東甫の上達を褒める内容がみえる。とともに、若鮎の画賛については、賛と句があつておらず、水中を行く鮎ではないとの批判がみえる。通常、画に賛をすることが多いが、五条坊木兎もかつて、この画をもつてきて、発句を乞うたとあるので、この場合、句に画をあらわしたのか。これは、『ありづか』の前書賛物部の二一四番句として、

笹の鮎の絵に

若鮎や鵜もまだ知らぬ笹の影

（ありづか）

と掲載されるものと対応している。十月十九日付書簡からは、画賛に対する也有の拘りが感じられる。この書簡の続きに、素郎という木兎系の俳人の記事が出てくるため、執筆年次は、宝暦中葉から明和初期頃と思われる¹¹。

なお、『也有画賛選釈』（学習院大学文学部近世文学研究室、平成18年3月）における、六林著『まにふむで』と『蘿要集』（二編・前書賛物部）の考察によれば、也有は宝暦三年に自画賛の作成を止め、さらに宝暦十二年に画賛を止めようとしていたという。結局、そのあとも、求めに応じて書いたようだが、この書簡は、そのような画賛を求められることが甚だしかった頃の書簡ともいえよう。

九月八日付書簡の場合、屏風仕立てにしたものか。ともあれ、東甫とのやりとりの中で、画と句の關係に拘りをみせる也有の姿が見受けられる。

四 昌阿坊と也有

白羽家には、也有は直接出てこないものの、也有ゆかりの昌阿坊が参加する歳旦が存在する。「明和九年不老井歳旦」である。これまで、也有と昌阿坊の直接の關係は、明和三年（一七六六）の『うろおぼえ』（兎尺序、昌阿坊編）以外、あまり指摘されてこなかったが、近年、昌阿坊画、也有賛の画賛を手にすることができた（縦九七・八浬、横二三・五浬）。

散た木へもどる一葉やみそさゝる
蘿隠（也有）
である〔図7参照〕。

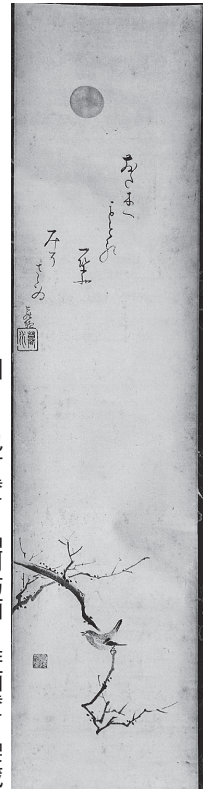


図7 也有賛 昌阿坊画 俳画賛 架蔵

枯れ枝にとまる鷦鷯を優しく月が照らす。也有と昌阿坊の関係性がみてとれる作品であろう。この発句は『蘿要集』三編に載る（全集番号一三二〇）。三編は、宝暦十三年（一七六三）から、明和二年（一七六五）頃の句がまとめて収容されている。これも、そのあたりの画賛とみてよいだろう。さて、その昌阿坊が参加する「明和九年不老井歳旦」（白羽家蔵）について、翻刻、紹介しておこう〔図8参照〕。

共表紙。横一冊。「不老井」（外題、篆刻）。墨付三丁。縦15・0 糎×横21・5 糎。

明和九壬辰 尾州名古屋

歳旦

うか／＼年月を過る程に

今としハ半百なれバと

人／＼にことぶき興せられて

くらぶれば年にはづかし今朝の春

兎尺

「（一ウ）」

我友と千とせの色や銚竹

楓亭

読切や我は論語のたつとし

左江

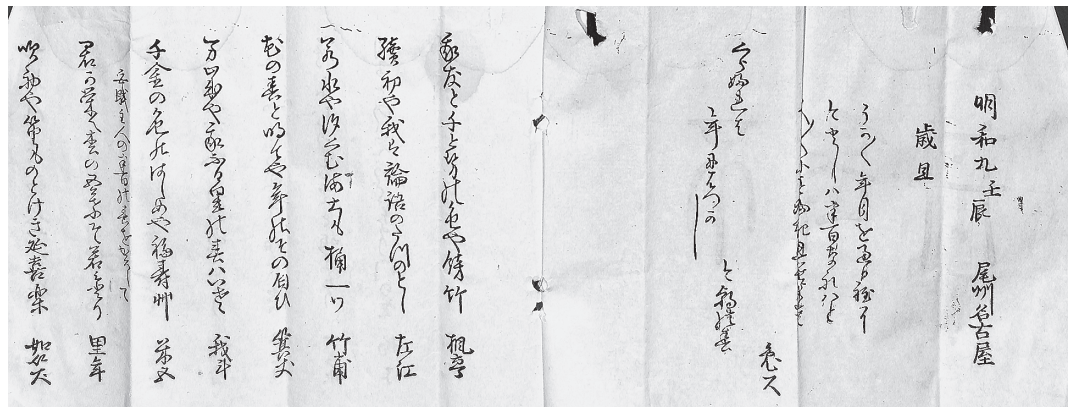


図8 明和九年不老井歳旦 白羽泰氏所蔵

若水や汐くむ海士も桶一ツ
花の春と明てや年のその匂ひ
万歳や我ふる里の春ハいさ
千金の色のはじめや福寿艸

安眠主人の半百の春を賀して

君が栄へ松の五葉ぞ若みどり
吹初や笛ものどけき延喜樂

里年 如笑
「(2オ)

世界みな春とひらくや梅の花
先嬉し氣の置所恵方棚

豆吾 李三

上下の音諷ゝや松かざり

去止 蝶吾

若水やむかへハ顔のあらたまり
蓬萊や俵の山に向ひ鳥

李冠 一泉

鶏に花の春ぞと明にけり

拍子 其蛙

目にも、先あらたなり門の松
初空の薫りや梅の明ヶこゝろ

「(2ウ)

不老井の除歳を祝するに

かの別室にいれば春待

かげの閑さを感じて

行年をしらぬ富士とや寒牡丹

昌阿坊

煤をはらひ餅搗て年の

用意も大方なれば

小短ふ門並ならば厄払

安眠斎 「(3オ)

本文は、以上である。兎尺の五十の祝もかねた明和九年（一七七二）の歳旦である。巻軸は昌阿坊、安眠斎兎尺の歳旦歳暮句でしめくくられる。拙稿「尾張横須賀における楓京と知柱亭・暁台・也有の交流に

ついて」にも、少し述べたが、この歳旦を包んでいたのは、「暮雨社中」（朱文方印）という袋である。流派をこえて、尾張地域の俳諧資料のやりとりが行われた形跡がみられる。当時の俳諧交流のあり方を示すものである。

*

以上、白羽家所蔵の也有一枚刷をもとに、也有と知多大野俳壇の關係、大野の巨扇の尾張俳壇に占める位置、また、也有と東甫、昌阿坊等の關係について検討してみた。也有と地方俳壇の交流については、野田千平氏『横井也有全集』や、同著『近世東海俳壇の研究』¹²⁾（新典社、平成三年）等の総合的な研究があるが、今回紹介したような、一枚刷、書簡資料からも、尾張俳壇における也有を軸とした交流のあり方の一端を垣間見ることができたと思われる。

なお、白羽家所蔵の暁台關係資料については、別稿で翻刻・紹介する予定である。

注

1 吉田弘氏『知多半島文学散歩』（私家版、平成17年）には、常滑市大野町の芭蕉句碑「青柳の泥にしたる、汐干哉」を巨扇が建立したと推測してる。

2 引用は、国文学研究資料館「日本古典籍総合目録データベース」の名古屋大学図書館本（岡谷文庫本）のマイクロフィルムによる。なお、さるみの会編『尾三古俳書解題』（昭和57年）に、藤園堂本をもとに要を得た解題が示される。

3 前引「尾張横須賀における楓京と知柱亭・暁台・也有の交流について」では、安永二年の暮雨巷の左右の句合の摺物が見られ、春幸も参加する。

4 『新修名古屋市史』でも、東湖と有丈が同一人物であることに言及がある。

5 堀切実氏校注『鶉衣（下）』（岩波文庫、平成23年）等参照。

6 昭和十六年に行われた「久村晁台百五十年記念展覧会出品目録」（主催、市立名古屋図書館、初音会）の目録に、遺墨の部の二番として掲載されている（伊藤次郎左衛門旧蔵）。

7 近年では、山本祐子氏「新出・横井也有自筆『鶉衣』をはじめとする也有書写本について」（名古屋博物館研究紀要35巻、平成24年）、松浦由起氏「『前野村前野氏系図巻二』と内藤東甫について——東甫享年への疑義」（豊田工業高等専門学校研究紀要（47）、平成26年）等の論がある。

8 拙稿「横井也有と飯田俳壇——桐羽宛也有書簡の紹介と俳諧指導の考察」（連歌俳諧研究二二六号、平成26年3月）参照。

9 拙稿「宝暦期における横井也有の蕉風意識について——美濃派および露川門への対応を視座として」（国語と国文学91巻3号、平成26年3月）参照。

10 『東海近世』五号（平成4年12月）の「近世書簡集（五）」に、十月十九日付（三九番、服部冬蔵氏蔵）、三月十八日付（四〇番、服部徳次郎氏蔵）の東甫宛の也有書簡二通が紹介される。

11 木兄は、東三河の俳諧宗匠で、宝暦十三年（一七六三）六月に没している。

12 『近世東海俳壇の研究』によれば、大野俳壇は、也有にゆかりの深い巴静の元文三年の歳旦帳から参加しており、宝暦元年以降の木兄歳旦、宝暦二年以降の白尼歳旦にも入集していることを付言していきたい。

〔付記〕 本稿は科学研究費の研究助成（基盤研究（C） 課題番号

17K02471）による成果の一部である。貴重な也有関係資料の紹介をご許可いただいた東海市の白羽泰氏に深謝申し上げたい。